

世界の文学

21

グラス

集英社版 世界の文学

21 グラス

ブリキの太鼓

集英社

DIE BLECHTROMMEL

by Günter Grass

Copyright © 1959 by Hermann Luchterhand Verlag
Darmstadt und Neuwied

Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo

© 1976 Shueisha

集英社版世界の文学 21

グラス

一九七六年八月二〇日印刷

一九七六年九月二〇日発行

訳者 高本研一

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三十一番五

電話 (〇三) 二三九一三八一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六

販売部 (〇三) 二三〇一六一七一

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

ブリキの太鼓

アンナ・グラスのために

この書の人物と筋は創作されたものである。現存あるいは死去した人物との類似はすべて偶像にすぎない。

目次

ブリキの太鼓

第Ⅰ部

第Ⅱ部

第Ⅲ部

解説

著作年表

高本研一訳

高本研一

3

5

179

390

547

557

第Ⅰ部

大きなスカート

そのとおり、ぼくは気違い病院の住人である。ぼくの看護人は、ぼくを見張っていて、ほとんど眼をはなすことがない。ドアに覗き窓がついているのだ。それなのに、看護人の眼は例の茶色なので、青い眼のぼくを看破することができない。

だから看護人は、断じてぼくの敵ではありえない。ぼくは彼に愛情すら抱いている。このドアのかけからのぞいている男が、ぼくの部屋に足をふみ入れるやいなや、ぼくは自分の生涯のさまざまな出来事を話してやる。覗き窓の邪魔など無視して、ぼくを知ってもらいたいのだ。この善良な男は、ぼくの話が高く評価しているらしい。なにかでたまたま話をすると、とたんに彼はそのお礼のしるしとばかり、紐を結んで作った最新の作品を見せてくれるからである。彼が芸術家であるかどうかは、いっさい触れないでお

くことにする。しかし、彼の作品が陳列されれば、新聞は好意的にとりあげ、幾人かの買い手の気をひくこともあるだろう。面会時間が終ると、彼は受け持ちの患者の部屋から集めてきたありきたりの紐を解きほぐし、その紐を結んで、軟骨状の複雑なお化けをつくる。それから石膏にひたして固め、木の土台に固定した編み針に留めるのである。

彼はときどき、自分の作品を彩色するという空想にふけている。ぼくはそんなことはやめろと言ひ、白いラッカーを塗った鉄のベッドを指さして、このいとも完全なベッドがけげばけしく塗られたさまを想像してみたまえと言ひ。すると彼はびっくりして、看護人の手を頭の上で打ち合わせ、少しく顔をこわばらせて、驚きの表情をなにもかも一時にあらわそうとし、それから彩色の計画を放棄するのである。

ぼくの白ラッカー塗りの鉄のベッドは、それゆえ、一つの尺度だ。しかもぼくにとってはそれ以上のものなのである。すなわち、このベッドは最後にたどりついた目的地であり、ぼくの慰めであり、もし病院当局が、少々手を加えることを許してくれるなら、ぼくの信仰になるだろう。つまりぼくにもうだれも近づけないように、ベッドの格子を高くしてもらいたいのだ。

週に一度の面会日が、白い鉄格子のあいだにかもされたぼくの静寂を中断する。その日にはぼくを救おうとするやつらがやってくる。わが身をぼくと比較してうぬべれたが

り、改めて自分を見直したがっている彼らにとって、ぼくを愛することは楽しみなのだ。なんと愚かで、神經質で、教養のないやつらなんだ。彼らは指の爪でぼくの白いラッカーを塗ったベッドの格子を引っ掻き、ボールペンや青鉛筆でラッカーの上にひよろひよろとしたみだらな男娼（だんしょう）を書きつける。ぼくの弁護士は、ハローと叫んで部屋に飛びこんでくるなり、いつもベッドの裾の左の支柱にナイロンの帽子をかぶせる。彼は部屋にいるあいだじゅう——じっさい弁護士というやつはおしゃべりなものだ——こうした乱暴なしぐさで、ぼくからおちつきと晴れやかさを奪い去る。見舞客たちは、アネモネの水彩画の下にある防水布をかけた白いテーブルの上に贈り物をおき、ぼくの救出がいろいろ計画され、あるいは現に進んでいることを説明する。彼らは飽きもせずぼくを救おうとしているのだが、彼らの隣人愛がいかに立派なものであるかをぼくに納得させることが成功したとなると、彼らはふたたび自分のことのほうが面白くなって、ぼくから去って行くのである。すると看護人がやってきて、部屋に風を通し、贈り物を包装した紐を集める。ときどきは換気の後でまだ暇があると、彼はぼくのベッドに腰をおろし、紐をほどこいている。長い静寂があたりを鎮する、そして最後に、静寂とはブルーノーのことであり、ブルーノーとは静寂のことだな、とぼくが言うまで。

ブルーノー・ミュンスターベルクは——ぼくは語呂（ごろ）合

せをしているのではない、これが看護人の名前なのだ——ぼくの勘定で原稿用紙を五百枚買ってきた。独身で子供のない、ザウアーラント出身のブルーノーは、貯えが不足する前に、子供の玩具も売っている小さな文房具屋へ出かけて行って、罫（び）の引いてない白紙を手に入れてくれるだろう。正確を期しているぼくの記憶力のために必要な紙だ。ぼくはけっして見舞客たち、たとえば弁護士とかクレップたちにこの仕事を頼むことはできなかったらう。友人たちはぼくのすることなすことが心配でたまらぬといったふうな愛情をぼくに對して抱いていたから、なにも書いてない紙のような危険なものをぼくにわたして、絶えず言葉を分泌するぼくの精神にその使用を許すようなことはきつとできなかったらう。

ぼくがブルーノーに、「ねえ、ブルーノー、処女の紙を五百枚買ってくるだろう」と言うと、ブルーノーは天井に眼をやり、このような紙だろうといわんばかりに人差し指をそちらへ向けて答えたものだ、「白い紙のことでしょう、オスカルさん」

ぼくは処女（ぢよ）女（にょ）のという言葉に拘泥（こうでい）し、店に行ってもそう言うてくれるようブルーノーに頼んだ。午後遅く包みを持って帰ってきたとき、彼は感慨（かい）に耽（ひた）るブルーノーといった顔をしていた。彼は彼の靈感のすべてを受け取ったあの天井を何度もじいっと見つめていたが、ややしばらくしてから言った、「あなたはいい言葉をすすめてくれましたね。処

女の紙をくれとわたしは言いました、すると売り子は顔を真っ赤にして、その要求したものをわたしてくれました」
ほうぼうの文房具屋の売り子たちをさかになしてしばらく話のはずんだが、長話に恐れをなして、ぼくは処女の紙などと言ったことを後悔した。それゆえぼくは静かにして、ブルーノールがとうとう部屋を出て行くまで待っていた。それからやっと五百枚の原稿用紙の入った包みを開けたのである。

ぼくはその強靱に撓う包みをそれほど長いあいだ手で持ちあげたり重さを量ったりはしなかった。十枚だけ抜き取り、残りはナイトテーブルにしまいこんだ。万年筆が引き出しのアルバムの隣に見つかった。インクはいっぱい入っている。補充のインクにも事欠かないはずだ。さてどんなふうを始めよう？

物語を中途から始めて、思い切り前に進んだり後に退いたりして混乱をひき起こしたっていいのだ。現代ふうに振舞い、あらゆる時代や距離を抹消し、あとになって空間時間の問題は最後には解決されたのだと宣言するなり宣言させるなりすることもできる。のっけに、今日では小説を書くことは不可能であると主張しておいて、しかる後、いわゆる自分自身の背後で、やすやすと強烈なヒット作をものし、とどのつまりは脈のある最後の小説家として存在することだってできるのだ。ぼくはまた、もはや小説の主人公はいないのだと最初に断言すれば、ひと目にもよく映るし

謙遜に見えることを了承している。すなわち、もはや個人的な人間はいないのだから、個性は失われたのだから、人間は孤独であり、だれも同じように孤独なのであって、個性的な孤独を主張する権利はなく、名前も主人公もない孤独な集団を形作っているのだから、小説の主人公はもういないのだと。すべてはそうなのであり、それが当然なのかもしれない。ぼく、つまりオスカルとぼくの看護人ブルーノールのために、それにもかかわらずぼくは確認しておきたい、ぼくたち二人が主人公であることを。覗き窓のあちら側にいる彼と、覗き窓のこちら側にいるぼく、まったく異なった主人公なのだ。そして彼がドアを開けたって、ぼくたち二人は、その友情や孤独にもかかわらず、やはり名前も主人公もたぬ集団ではないのである。

ぼくの生まれるずっと以前のことから話を始めよう。というのは自分がこの世に生を享けた日付を書きしるす前に、せめて祖父母の片方だけでも思いだす根気のない人間は、だれも自分の生涯を書きしるすべきではないからだ。わが気違い病院の外でこたごたした生活を送らねばならぬ読者の皆さんに、またぼくの前稿用紙の貯えのことなんぞ気にもかけない友人諸君と毎週の訪問者諸氏に、ぼくはオスカルの母方の祖母をご紹介します。

ぼくの祖母アンナ・ブロンスキーは十月のある日の午後遅く、何枚もスカートをはいてじゃがいも畑のへりに坐っていた。午前中だったら、祖母がどれほど上手にしなびた

茎と葉を掻き集めてはきちんとした山を築くかを見ることができたろう。お昼に彼女はシロップで甘くしたラードを塗ったパンを食べ、それから最後に畑を掻きならし、何枚もスカートをはいてやれやれとばかり、ほぼいっぱいになった二つの籠のあいだに坐っていたのだ。垂直に上に向け、爪先を揃えた長靴の底の前で、じゃがいもの葉を焼く火がくすぶっていたが、その火はときどき喘息のように燃えあがり、煙はほとんど勾配のない地表に沿って、おずおずと平らに這っていった。一八九九年のことだった。彼女はカシユバイの中心部のピッサウの近くに、いやむしろ煉瓦工場のもっと近くに坐っていた、ラムカウの前、フィイレックの背後に坐っていた、ブレンタウへ通じる街道のデイルシャウとカルタウスのあいだに、ゴルトクルークの黒黒とした森を背負って坐っていたのだ。そして先端の焦げたはしばみの枝でじゃがいもを熱い灰の中に押しこんだ。

ほくはたった今、祖母のスカートにとくに言及し、はっきりと、彼女は何枚もスカートをはいて坐っていたと言ったはずだが、——そう、この章には『大きなスカート』なる標題がついている——それはほくが、この衣服に恩義があるのを知っているからである。祖母はスカートを一枚だけではなく、四枚重ねてはいていた。一枚のスカートと三枚のベチコートをはいていたなどというのではない。四枚ともスカートで、その一枚が次の一枚を支えていたのだが、彼女はその四枚ともある一定のシステムにしたがって身に

つけていた、つまりスカートの順序を毎日変えたのである。昨日一番上にはいていたスカートが今日は二番目になり、昨日二番目だったものが三番目になった。昨日は三番目だったスカートが今日は彼女の肌の近くにのびのびと接していたが、それはなんの模様もないのだった、すなわち、わが祖母アンナ・ブロンスキのスカートはどれも同じじゃがいも色を優遇していたのである。その色が彼女には似つかわしかったのにちがいない。

この色合いを除けば、祖母のスカートは常軌を逸したほど布地をたつぷり使っている点できわだっていた。それらは釣鐘型に円く仕上っていたのだが、風が吹きつけてくると大きくふくらみ、風がそれに満足するとだらりと垂れさがり、風が通り過ぎるときはたばた音を立てた。そして祖母が風に背を向けて立つと、スカートは四枚とも彼女の前方になびき、腰をおろしたときには、彼女はスカートを身体のまわりにたぐり寄せた。

いつもふくれあがり、垂れさがり、しわになった四枚のスカート、あるいはごわごわしてからつぼのままベッドと並んで立っているスカートとは別に、祖母は五枚目のスカートを持っていた。これはじゃがいも色をした他の四枚といかなる点でも異なるところがなかった。またこの五枚目のスカートは必ずしもいつも五番目でもなければ、同じものでもなかった。その兄弟たちと同様に——というのはス

カー트는男性名詞なのである——それは交代の法則に支配され、四枚の身につけたスカートに従属して、順番がくると、他のスカートと同じく、五日目の金曜日ごとにたらいの中に入れられ、土曜日には台所の窓の前の干し物綱にかけられ、乾くとアイロン台に載せられねばならなかった。

祖母が、掃除料理洗濯アイロン掛けの土曜日の後、牛の乳をしぼり餌をやってから、どつぷりと浴槽につかって、石鹼の泡になにかを打ち明け、ふたたび風呂の水位を下げ、大きな花模様タオルに身体を包んで、ベッドの縁に腰をおろすとき、四枚の身につけていたスカートと一枚の洗いたてのスカートが彼女の前の床の上に拡がっているのだった。彼女は右手の人差し指で右の眼の下まぶたをおさえ、だれにも、兄のヴィンセントにさえも相談せずに、それゆえ素早く決心をつけた。彼女は素足で立ち、じゃがいも色の色つやをほとんど失ってしまったあのスカートを爪先でわきへ押しやった。それからきれいなスカートがその空いた場所を占めた。

彼女が確固たる観念を抱いているイエス様に敬意を表するために、翌日の日曜の朝にはラムカウの教会に出かけるのだったが、そのとき、新たな順序に重ねられたスカートのはき初めが行なわれた。祖母は洗い立てのスカートをどこにはいたのだろう？ 彼女は身ぎれいなばかりではなく、いくらか見栄っぱりな女だったから、いちばんよいスカ―

トを人目につくところに、つまり天気の良い日にはお日さまのあたるところにはいたのである。

ところで、祖母がじゃがいもを焼く火の向う側に坐っていたのは月曜の午後のことだった。日曜日のスカートは、月曜には、一枚だけ彼女の肌に近づいていて、日曜日に彼女の肌のぬくもりを持っていたスカートが、月曜には、まさしく月曜日らしく陰気に、ほかのスカートより上で腰から垂れさがっていた。彼女は口笛を吹いたが、歌にはならなかった。そして、焼けたじゃがいもの最初の一個をはしばみの枝で灰の中から掻きだした。彼女はそれを風に当てる冷ますために、くすぶりつづける焚き火の山から十分に離れたところへじゃがいもを押しやった。それからとがった枝で、焦げて皮のはじけたじゃがいもを突き刺し、口へ持っていった。彼女の口は今ではもう口笛を吹くのをやめ、風でかさかさになりひび割れた唇を開けて、皮についた灰と土を吹いていた。

吹きながら祖母は眼を閉じていた。十分に吹いたと思ったとき、彼女は片眼ずつ眼を開け、透き間があいているが虫の食っていない門歯でもってかぶりついたが、すぐまた噛むのをやめ、半分に食いちぎられたまだ熱い、ほかほかと湯気の立つじゃがいもを、開けた口の中にいれたまま、煙と十月の空気を吸いこんでふくらんだ鼻孔ごしに、畑に沿って、近くの地平線まで、丸い眼をじっと凝らしたのだった。そこには点々と連なる電信柱と、煉瓦工場の煙突の

上部三分の一がわずかに顔をのぞかせていた。

電信柱のあいだになにか動くものがあった。祖母は口を閉じ、唇をぐっと引き締め、眉を寄せて、じゃがいもをもぐもぐやっていた。電信柱のあいだでなにか動いた。なにかが跳びはねた。三人の男が電信柱のあいだで、煙突のほうへ跳んだのだ。それから先頭の一人がくると向きを変えて、新たに走り始めた、ちびで太っているように見えた、ふいに煉瓦工場の上に現われるとそれを越えた。残った二人はもつと瘦せぎすで背が高かったが、彼らもどうにか煉瓦工場を越えたものの、もうまた電信柱のあいだに姿を現わした。ちびで太った男は急転回した、瘦せぎすでノッポの男よりもせわしげだった。その彼がもう煙突の向うに転がっていったのだから、二人の男もふたたび煙突のほうに跳ばなければならなかったのに、そのとき、二本の親指のように跳ぶのをやめて、そのまま走りだして、突然消えてしまった、やる気がなくなったように見えた。そして小さな男も跳びながら、煙突から地平線のかなたに落ちていった。

彼らはいまそこにおいて、中休みをするか、着替えをするか、煉瓦造ってそのお金をもらうかしていたのだらう。

祖母はその中休みを利用して、二個目のじゃがいもを突き刺そうとしたとき、思わず空を突いた。ちびで太っているように見えたあの男が、同じ着物のまま、地平線の上によじ登ってきたのだ。地平線はまるで木柵みたいであり、

その男は、彼の後を追って跳んだ二人の男を、柵の向うの煉瓦のあいだか、ブレンタウへ行く街道に置いてきたみたいだった。それにもかかわらずその男はせわしげで、電信柱よりも早く歩こうとして、ゆっくりと大股に跳びながら畑を越えた。靴底の泥をとばし、泥から身体を引き離した。しかし彼はどんなに大股に跳ぼうとも、実はたいそう辛抱強く粘土の上を歩いていたのだ。ときどき彼は地面にへばりつき、それからふたたび、ちびだが太った身体で跳びながら、額の汗を拭うしばしのあいだ、空中に静止しているように見えた。そうした後で彼のバネのきいた足は、切り通しと直角に敵の切つてある、十エーカーのじゃがいも畑に隣接したあの耕されたばかりの畑をふまえることができた。

そして彼はその切り通しに達した。そのちびで太った身体が切り通しに消えるか消えないうちに、そうこうするあいだに煉瓦工場へ行ってきたらしい瘦せぎすでノッポの二人連れもすでに地平線上に這いあがり、ゆっくりと泥の上を歩いてきた。けっして瘦せこけてはいないが、あまりにノッポで瘦せぎすだったので、祖母はまたしてもじゃがいもを突き損ねたのだ。つまりそれぞれ違ったふうに成長したとはいえ、三人の大人が電信柱のまわりを跳びはね、煉瓦工場の煙突をへし折らんばかりにし、それからまずちびで太ったのが、つづいて瘦せぎすでノッポというぐあいに間隔をおいてはいるが、三人揃ってますます靴底にへ

ばりつく泥を苦勞しながら辛抱強く引きずり、泥をきれいに落とすと、二日前ヴィンツェントが耕した畑を跳んできて、切り通しに姿を隠すなんぞという図は、毎日見られることではなかったからである。

今や三人とも消えてしまったので、ぼくの祖母はほとんど冷めきったじゃがいもを思いきって突き刺すことができた。薄皮についた土と灰をさっと吹きとばすと、すぐさま丸ごと口の中に押しこんで、こう考えた、もし考えたといえるなら——彼らはきつと煉瓦工場の人たちにちがいないと。そして一人が切り通しから跳びあがったとき、まだもぐもぐと噛んでいた。その男は黒い大きな口ひげごしにあたりをぎよぎよろ見まわし、二跳びで焚き火のところへやってきて、火の前と後と横に同時に立っていた。ここで呪いの言葉を口にするかと思えば、あちらでのおどおどした顔をし、どこへ行ったらよいかわからず、もどることもできなかつた。切り通しをうしろから瘦せぎすでノッポの二人がやってくるからだ。それで彼はハタと膝を打ち、顔じゆうを眼にした。両眼が飛びだしそうになり、額から汗も飛び散った。口ひげをふるわせて喘ぎながら、彼は無遠慮にももつと近くまで匍つてきた、靴のすぐ前まで匍い寄った。その男は祖母の眼と鼻の先まで匍い寄ると、小さな太った動物のように祖母を見つめた。祖母は大きな溜息をつかずにはいられなかつた。もうじゃがいもなんぞ噛んではいられなかつた。靴底をかしげると、もはや煉瓦工場のこ

と、煉瓦や煉瓦工のことなど考えずに、スカートを、いや四枚のスカートを全部高くからげた。あの煉瓦工場の男ではないちびで太ったのがすっぽりもぐりこめるほど、一氣に高くからげたのだ。口ひげが消え、もう動物のようには見えなかつた、ラムカウの男でもなければ、フィレックの男でもなかつた。スカートの下でのおどおどしていて、もはや膝を叩くでもなく、太つてもいなければちびでもなかつた。それにもかかわらず彼はどつかとそこに腰を据え、喘ぐことも震えることも忘れ、手で膝を打つことも忘れていた。つまり世界の最初の日か最後の日のようにあたりは静かだったのである。そよ風が焚き火でおしゃべりし、電信柱は音もなく自分たちの数を数え、煉瓦工場の煙突は態度をくずさなかつた。そして彼女、つまりぼくの祖母は、二枚目を蔽う一番上のスカートのしわをしかつめらしく伸ばした。四枚目のスカートの下の彼のことはほとんど感じなかつた。三枚目のスカートでも、彼女の肌にとつて初めての驚くべき経験となろうとしているものがなんであるかをまだぜんぜん理解しなかつた。それは驚くべきことであつたが、一番上はしかつめらしく横たわり、二枚目三枚目はまだ理解していなかつたので、彼女はじゃがいもを二、三個灰から掻きだし、右ひじの下に籠から生のやつを四個つかんで、それをつぎつぎに熱い灰の中に押しこみ、おまけにもつとたくさんの灰をかぶせて、煙が立ちこめるように火を掻き立てたのであつた——彼女にはそれ以外にどう

することができただろう？

ぼくの祖母のスカートがやっと平静にもどったときだった。烈しく膝を叩いたり、場所を変えたり、火を掻き立てるたびにその方向を見失っていたじゃがいもの焚き火の濃い煙が、ふたたびうまく風に乗って、煙を飴うように南西の方向に黄色くたなびいたとき、いまやスカートの下に坐りこんでいるちびで太ったのを追いかけてきたノッポで瘦せぎすの二人連れが、切り通しから姿を現わした。ノッポで瘦せぎすたちは職業がら地方警察の制服を着ていることがわかった。

彼らはほとんど飛ぶように祖母のかたわらを過ぎ去った。しかも一人は焚き火の上を跳んで行かなかったろうか？しかし彼らとはとぜん自分たちが踵を持っていくことに気づくと、ブレーキをかけ、くるりとふり向き、大股で歩み寄り、制服に長靴の格好で煙の中に立っていた。そして咳きこみながら、煙から制服姿を引っぱり出したが、煙もいっしょについてきた。それで祖母に話しかけたときにも相変らず咳きこんでいた。彼らは祖母がコリヤイチェクを見たかどうか知リたかったのである。つまり彼女はこの切り通しのかたわらに坐っているのだし、彼、コリヤイチェクは切り通しを通して逃げたのだから、彼女は彼を見たはずだというのだった。

ぼくの祖母はコリヤイチェクなんぞ見なかった、彼女はコリヤイチェクを知らなかったのだから。その男が煉瓦工

場の人間であるかどうか彼女は知りたと言った、煉瓦工場の人たちだけなら知っていたからだ。制服たちはしかし、コリヤイチェクは煉瓦とはなんの関係もない、ただちびで太った男だと教えた。祖母は覚えていて、そんな男が走って行くのを見たと言い、決勝点を指さすように、とがった枝に刺した湯気の立つじゃがいもで、ピッサウの方向を示した。じゃがいもの教えるところによれば、それは、煉瓦工場の煙突から右へ数えて六番目と七番目の電信柱のあいだにあるはずであった。しかしその走り去った男がコリヤイチェクであるかどうかは、祖母は知らなかった。わからなかったのを足もとの焚き火のせいにした。火の番はいろいと手のかかることで、火はほどよく燃やさねばならぬ、それゆえ、そばを走り過ぎた人であるうが、煙の中に立っている人であるうが、他人さまにはかまっていられない、そもそも彼女の知らない人たちのことなんぞにかまっていられない、ただピッサウ、ラムカウ、フィーレック、それに煉瓦工場にだれがいるかを知っているだけだ、——ほんとにそれで十分なのである、と彼女は言ったのだ。

祖母はこう言うのと、そっと溜息をついた、しかしなんのために溜息をついたかを制服たちにわからせる程度にははつきりと。彼女は焚き火に向ってうなずいた、それは、彼女が溜息をついたのはほどよい火加減のためであり、また幾分か煙の中のたくさんの人たちのためでもあることを意味していた。それから彼女は大きく開けた口の門歯でじ

やがいもを半分かじると、黙々と噛みながら、眼玉を左上方に移動させた。

地方警察の制服を着た男たちは、祖母のうつろな眼差しからなんの言葉も読みとることができなかった。彼らは電信柱の向うにビッサウを探しているものやらどうやらわからず、そのためさしあたって、隣にあるまだ燃やしてないじゃがいもの葉の山を腰のサーベルで突いた。とつぜん頭になにかひらめくものがあつたとみえて、彼らは時を同じくして、祖母が両わきの下に抱えていたじゃがいものほぼ一杯つまった籠をひっくりかえした。そしてなぜ籠から彼女の足もとにころがり出るのがじゃがいもばかりで、コリヤイチェクがいっこう姿を現わさないのか、しばらく理解できないでいた。疑わしげに彼らはじゃがいもの山のまわりを忍び足に歩いていた。まるでコリヤイチェクがとつさの間にその中に隠れてしまったみたいだった。彼らは狙いさだめて突き刺したが、突かれた男の悲鳴が聞こえないのでげんそうな顔をした。彼らの疑惑はすでにすぎれた茂みの一つ一つに、鼠の穴の一つ一つに、群れをなしたもぐらの盛り土に向けられ、さらに繰り返し多くの祖母に向けられた。彼女は根が生えたようにそこに坐り、溜息を吐き、瞳孔を隙の下に入れて白眼を見せ、あらゆるカシユバイの聖徒の名を唱えていた——それは、ちよろちよろと燃えている焚き火とひっくりかえされた二つのじゃがいもの籠のために、痛ましく誇張され声高になった。

制服たちはたっぷり半時間そこにいた。ときどき焚き火から遠ざかつてはまた近づいた。彼らは煉瓦工場の煙突を目標にしてビッサウも占拠しようとしたが、攻撃を延期して、紫色の手を焚き火にかざし、とどのつまりは、溜息を吐くのをやめずにいる祖母から、小枝に刺した皮のはじけたじゃがいもを一個ずつせしめてしまった。しかし口をもぐもぐさせているあいだも、制服たちは自分たちが制服を着ていることを忘れず、切り通しのえにしに沿いに畑の中へ少しばかり走りこんだ。すると兎がびっくりして跳びだしたが、それはコリヤイチェクという名ではなかった。彼らはふたたび焚き火ではかほかと湯気の立つ粉をふいたじゃがいもを見つけた。それから彼らはいくぶんか戦いに疲れ平和を望んで、生のじゃがいもを籠の中に集めるつもりになった。先ほどあの籠をひっくりかえしたのも彼らの義務からしたことだったのだ。

夕暮れが十月の空から斜めに降る細かい雨と墨汁のような黄昏をしばらくしたときになってやっと、彼らは不承不承そそくさと、遠くの定かならぬ境界石に攻撃をしかけた。しかしそれを片づけてしまうと、彼らは満足していた。おまけに少しばかり脚の筋を違えた彼らは、雨に濡れてあたり一面にけぶっている焚き火の上で揉み手しながら、緑の煙の中でもう一度くしゃみをし、黄色の煙の中で眼に涙し、それから咳きこみ涙を流しながらビッサウの方角へ大股に去って行った。コリヤイチェクがここにいないければ、コリ

ヤイチエクはビッサウにいるにちがいない。警官というやつはいつも二つの可能性しか知らないものだ。

ゆっくりと消えかかる焚き火の煙が、まるで五枚目の大きなスカートのようにぼくの祖母を包みこんだ。そのため四枚のスカートをはき、溜息を吐き、聖徒の名を唱えている彼女は、コリヤイチエク同様に、スカートの下にいたわけである。制服たちがもはや夕暮れの電信柱のあいだにゆっくりと漏れかかってアップアップしている点にしかすぎなくなつたとき初めて、祖母はようやく立ちあがった。まるですっかり根を生やしてしまつたのに、ひげ根と土くれとをいっしょに引きずりながら、ちょうど始まつたばかりの成長を中断してしまつたみたいだつた。

コリヤイチエクは、とつぜん覆いをとられ、横たわつていたちびで太つた身体が雨にさらされたとき、寒くなつた。彼はスカートの下で開けておいたズボンのボタンを素早くかけた、不安感としやにむに隠れ家を求める気持ちとのあまり、彼はボタンをはずしていたのだつた。彼の根棒があまりにも急速に冷えてゆくのを恐れて、彼は急いでボタンをはめた、すっかり冷えきつてしまう恐れがあるほどの秋冷の候だつたからである。

熱いじゃがいもが四つまだ灰の下にあるのを見つけたのは祖母だつた。三つコリヤイチエクにやり、自分は一つとって、かぶりつく前に、彼が煉瓦工場の人間かどうか訊ねた、コリヤイチエクが煉瓦工場からではなく、どこか他の

所からきたのをちゃんと知っているくせに。それから彼女は彼の答えなど無視して、軽いほうの籠を彼に背負わせ、自分は重いほうを背にし、空いた手には熊手と鍬を持った。そして四枚のスカートの身を固め、籠とじゃがいもと熊手と鍬を携えた彼女は風とともにビッサウ採掘場のほうへ去つて行つた。

ビッサウ採掘場はビッサウそのものとは違つていて、むしろラムカウの方角にあつた。二人は煉瓦工場を左手に見ながら、黒い森へと道をとつた、その中にゴルトクルークがあり、その背後にブレンタウがあるのだつた。しかしビッサウ採掘場は森の手前の窪地にあつた。ぼくの祖母はそこへちびで太つたヨーゼフ・コリヤイチエクを連れていった、彼はもはやスカートから離れることができないのだつた。

いかだの下

ブルーノの眼に守られているガラスのはまつた覗き窓の視野の中に横たわつたまま、ここ、つまり気違い病院の石鹼で清められた鉄のベッドで、カシユバイのじゃがいもの葉を焼く焚き火の煙と糸のような十月の雨を描写するのはまったく容易なことではない。巧みに辛抱強く使えば、肝腎なことを紙にするために必要な枝葉末節をなんでも思い浮べてくれるぼくの太鼓がなければ、また、毎日三時